

柏崎市子どもの生活状況調査

～ 概要版 ～

子ども未来部子育て支援課

I 調査の概要

1 調査の目的

子どもの貧困対策を進めるに当たっての課題や施策の効果等を確認するための基礎資料を得ることを目的に実施した。※令和4（2022）年11月調査実施

2 調査対象者及び回収状況

(1) 保護者

区分	配布数（人）	回収数（人）	回収率（%）
合計	2,420	1,722	71.2
①5歳の子ども（年中相当）	507	/	/
②小学5年生	613		
③中学2年生	660		
④高校2年生相当	640		

注) ①④：調査票の配布は郵送、回収は郵送又はウェブでの回答による。

②③：学校を通じて調査票を配布、回収は学校を通じて又はウェブでの回答による。

(2) 小学生・中学生・高校生

区分	配布数（人）	回収数（人）	回収率（%）
合計	1,913	1,350	70.6
①小学5年生	613	525	85.7
②中学2年生	660	567	85.9
③高校2年生相当	640	254	39.7
高校2年生	—	249	—
高校にはいない	—	5	—
④学年不明	—	4	—

注) ①②：学校を通じて調査票の配布・回収を行った。

③：調査票の配布は郵送、回収は郵送又はウェブでの回答による。

II 調査結果の概要（まとめ）

本報告書では、等価世帯収入の水準別、世帯の婚姻状況別（ふたり親・ひとり親）で比較分析を行った。分析の結果、等価世帯収入の水準別や世帯の婚姻状況によって、子どもの学習・生活・心理など、様々な面に影響を受けていた。これは国（内閣府）が実施した「令和2年度子供の生活状況調査」の結果をとりまとめた報告書の分析結果と類似しており、収入水準が低くなるにつれ、マイナス要素の回答が目立つ傾向にあった。

本報告書で示す等価世帯収入の水準別の低い階層（階層1）を相対的貧困状態と位置付けした場合、11.3%が大多数よりも貧しい状態に置かれている。（本調査で回答いただいた子育てしている世帯の9軒に1軒の割合）一方、それ以外の階層の世帯、特に「階層2」の階層の世帯においても、何らかの悩みや課題があると推察される。また、「階層1」と「階層2」の階層の約8割以上がひとり親である。

共働き世帯は8割を超えているが、国の調査結果と比較して、母親の就労において、正職員等の割合は収入水準の階層別にみても国よりも市が高い割合にあり、パート等の割合は市よりも国が高い。

※令和2年度に実施された国の調査では、全国の中学2年生及びその保護者を対象としており、本調査と対象者（年中、小5、中2、高2）に違いがある。また、調査時期などにも影響が出やすいことから、本調査では、国の調査結果と直接的な比較はできないが、傾向をみるものとして比較する。

Ⅲ 保護者向け調査結果の概要

基礎項目

■生計を同一にする家族の人数(無回答除く)

区分	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人
%	1.8	13.8	36.8	26.8	13.0	6.2	1.1	0.3	0.1

■生計を同一にする親の婚姻状況(無回答除く)

区分	結婚している	離婚	死別	未婚	わからない	いない
%	87.8	9.1	1.0	0.5	0.1	0.7

■親の最終学歴(その他・いない・無回答除く)

区分	中学	高校	専門学校	高等専門学校	短大	大学	大学院	わからない
母(%)	2.3	33.3	30.5	0.6	13.4	14.1	3.4	0.2
父(%)	3.9	36.6	16.2	0.8	4.4	23.7	5.8	0.5

■親の就労状況(無回答除く)

区分	正社員等	嘱託等	パート等	自営業等	無職	わからない	いない
母(%)	43.4	5.3	34.4	5.4	9.1	0.3	1.1
父(%)	82.1	1.2	0.5	6.1	0.8	0.6	6.5

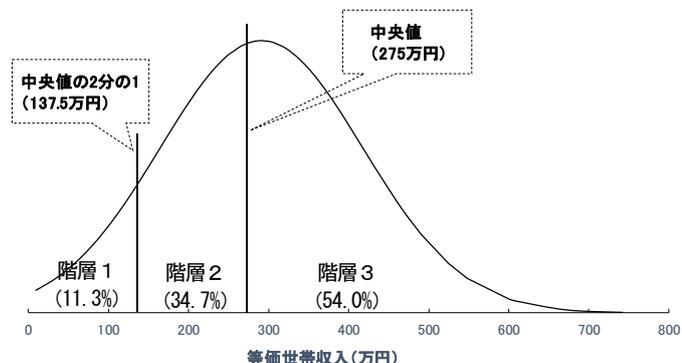
■等価世帯収入による収入水準基準

世帯の収入による傾向を把握するため、指標として「令和3(2021)年の世帯全員のおおよその年間収入(税込)」と「生計を同一にする家族人数」から『等価世帯収入(単位:万円)』を算出し、その水準別に比較分析を行った。

● 等価世帯収入

『等価世帯収入』の分布の中央値(275万円)を求め、以下の基準で分類した。

- ・階層3
(中央値以上)
275万円以上
- ・階層2
(中央値の2分の1以上中央値未満)
137.5~275万円未満
- ・階層1
(中央値の2分の1未満)
137.5万円未満



【参考】 国(中学2年): 中央値(317.54万円)、中央値の2分の1(158.77万円)

柏崎市(中学2年): 中央値(275万円)、中央値の2分の1(137.5万円)

1. 生活全般について

P13、45～46 回答者の過半数 (54.0%) は、『等価世帯収入』が「中央値以上」(以下「階層3」という)である。階層3では、現在の生活について、「ふつう」又は「ゆとりがある」と感じる人が8割以上を占めており、「苦しい」と感じている人は2割に満たない。

一方、「中央値の2分の1以上中央値未満」(以下「階層2」という)、「中央値の2分の1未満」(以下「階層1」という)では、階層3に比べ、「ふつう」又は「ゆとりがある」の割合は低い。『等価世帯収入』の水準が低下するほど「苦しい」「大変苦しい」の割合は上昇しており、階層1では53.9%と半数以上を占めている。

P48、156、162 母子家庭のうち、階層1の占める割合が55.6%と高く、母親の就労形態は、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」が「正社員・正規職員・会社役員」よりも多い。世帯全員のおおよその年間収入(税込)が400万円以上の世帯は皆無で、平均は185.6万円となっている。(階層3の平均:792.9万円、階層2の平均:452.8万円、全体の平均:606.3万円)

P71～72 また、生活満足度をみると、収入の水準が低下するほど生活満足度も低下する傾向があり、10点満点の平均は、階層3で6.8点、階層2で5.8点、階層1で5.0点となっている。

2. 子育てについて

P22～23 『子育てを楽しんでいる』(「とても楽しいと感じる」と「まあまあ楽しいと感じる」の合計)人の割合は、階層3で93.1%、階層2で92.6%、階層1で87.8%となっており、水準が低下するほど割合も低下する傾向にあるが、さほど大きな差はみられない。収入の水準に関わらず、子育ての楽しさを感じている様子がうかがえる。

P34～35 子どもの進学については、収入の水準が高いほど「大学まで」の割合が高く、階層3では5割弱を占める。逆に「高校まで」と「専門学校まで」は、水準が低下するほど割合が上昇し、階層1では「高校まで」と「専門学校まで」の合計で5割を超えている。

P53～54 子育てで負担に感じるなどを見ると、収入の水準が低下するにつれて、制服等の身の回りのものや給食費・学級費、修学旅行の積み立てといった必要な教育費を負担に感じる人の割合が上昇している。階層1では、制服等の身の回りのものにかかる費用を負担に感じる人が6割を超えている。

P55～61 また、収入の水準が低下するにつれて、過去1年間に経済的な理由で必要な食料や衣服の購入ができなかった、医療機関を受診できなかった、公共料金・電話などの通信料、家賃や住宅ローンの支払いが滞ったと回答した人の割合が上昇している。

P63～67 経済的な理由で経験したことについてみると、いずれの項目も「まったくなかった」が大多数を占めているが、階層別にみると、いずれの項目も、階層が低くなるにつれて頻度が高まる傾向がみられる。階層1では、「よくあった」の割合は、『子どものための本や絵本が買えなかった』で5.8%、『子どもにおこづかいを渡すことができなかった』で15.3%などとなっている。

P68 経済的な理由でできなかったことについてみると、「子どもを学習塾に通わせることができなかった」と「子どもを習いごとに通わせることができなかった」がそれぞれ1割強となっている。階層別にみると、どちらも階層が低くなるにつれて割合が上昇している。

3. 子育て支援制度について

P80～81 公的な子育て支援制度の利用についてみると、収入の水準に関わらず、『就学援助』と『児童扶養手当』以外は、利用者が極めて少ない。

P83～84 収入の階層1が制度を利用しない理由をみると、いずれの制度も「知らなかった」の割合は5%以下であり、認知度は高いものと思われる。いずれの制度も「制度の対象外だと思う」が多数を占めているが、

『就学援助』では、「手続きがわからない・利用しにくい」をあげる人が2割弱みられた。『母子家庭等就業・自立支援センター』、『ひとり親家庭の就労に必要な資格取得支援』、『ひとり親家庭および寡婦の方への貸付』は、それぞれ「利用したいと思わなかった」が1割を超え、比較的高い割合となっている。

なお、『生活困窮者の自立支援相談窓口』などで「それ以外の理由」が1割を超えているが、これらは、利用していることを周りに知られたくない、相談などに自分自身の時間が取られる、将来の返済が心配(貸付)、などの理由であると推測される。

IV 子ども向け調査結果の概要

1. 父母の就労状況について

P94 父母の就労状況については、共働き家庭が圧倒的に多く、子ども全体（以下「全体」という。）では約8割を占めている。

2. 勉強について

P95 ふだん学校の授業以外でどのように勉強をしているかについては、「自分で勉強する」が9割弱で最も多くなっている。学年が上がるほど「家の人に教えてもらう」の割合が低下する傾向がみられる。階層が低くなるにつれて学校の授業以外で勉強しない割合は上昇している。

P96 学校の授業以外での1日あたりの勉強時間について、「学校がある日（月～金曜日）」と「学校がない日（土・日曜日・祝日）」どちらも「30分以上、1時間よりすく少ない」の割合が最も高くなっている。学年が上がるほど1日の勉強時間が長くなる傾向がみられる。高校2年生の2割弱は、学校がない日は3時間以上と回答している。階層1では学校の授業以外の勉強時間が30分未満の子の割合は3割強と高い。

P97～98 クラスの中での成績については、高校2年生は、『上位』の割合が約4割を占め、小・中学生より高くなっている。その一方で、学校の授業の理解状況について、学年が上がるほど低下する傾向がみられ、高校2年生の約半数は、教科によっては学校の授業がわからないときがあると回答している。「成績がやや下のほう」と「下のほう」と回答した割合は、階層3で2割強、階層2で3割弱に対し階層1で4割強となっている。

P99 授業がわからなくなった時期については、小学5年生は、「小学3・4年生のころ」が約5割を占めている。「小学5・6年生のころ」も4割を超えている。中学校2年生は、「中学1年生のころ」が過半数を占めている。高校2年生は、「高校1年生のころ」と「高校2年生になってから」がそれぞれ3割弱となっている。

3. 進学希望について

P100～103 将来どの段階まで進学したいかについては、小学5年生の約3割、中学2年生の4割強、高校2年生の過半数が「大学まで」の進学を希望している。「高校まで」と「専門学校まで」がそれぞれ1割台となっている。希望する教育段階を選んだ理由は、小学5年生、中学2年生ともに「希望する学校や職業があるから」が最も高く、高校2年生で「希望する学校や職業があるから」が7割弱となっている。大学以上を希望している子は階層が低くなるにつれて割合が低下しており、国の調査結果と比較しても低い傾向にある。

4. 部活動等への参加状況・参加していない理由

P104～105 地域のスポーツクラブや文化クラブ、学校の部活動への参加状況については、小学5年生の約6割、中学2年生の9割強、高校2年生の7割強が「参加している」と回答している。階層が高くなるにつれて「参加していない」割合が上昇している。参加していない部活動等に参加していない理由については、「入りたいクラブ・部活動がないから」が4割強、「塾や習い事が忙しいから」が約1割、「その他」が3割強を占めている。

5. 日常生活について

P106 持っているものや使うことができるものについて、携帯電話・スマートフォンは、学年が上がるほど所有率も上昇し、高校2年生では95%となっている。

P107~108 放課後過ごす場所は、いずれの学年も「自分の家」が最も多く、一緒に過ごすのは家族（おうちの大人・きょうだい等）や学校の友達が多い。その一方、小学5年生及び中学2年生の約2割は「ひとりである」と回答している。

P109~110 食事の状況について、いずれの学年も朝食を食べる頻度は、夕食や夏休みや冬休みなどの期間の昼食に比べ低いが、全体では、いずれの食事も8割から9割以上が「毎日（週7日）」と回答している。また、一人又はきょうだいのみで食事をとる頻度は、学年が上がるほど高くなる傾向がみられる。

P111 体調不調時の医療機関での受診について、いずれの学年も体調不良のときには、8割以上が医療機関で受診できている。「連れていってもらえないときがある」と「ほとんど連れていってもらえない」の合計が1割弱みられ、少数ではあるが受診できていない子どもが一定数存在している。

P112 就寝時間に関して、ほぼ同じ時刻に就寝している子どもが約3割を占めている。一方、小学5年生の1割強、中学2年生と高校2年生の2割強は、就寝時刻が一定していない。

6. 家族の世話

P113 家族の世話をしている子どもは、小学5年生及び中学2年生の2割強、高校2年生の約1割と回答している。世話を必要としているのは「母親」や「きょうだい」が多くなっている。

※『世話』の意味を『手伝い』と取り違えた錯誤回答が多く含まれるものと思われる。

P114~117 家族の世話の内容は、「家事（食事の準備や掃除・洗濯）」が7割強で最も多い。学年が上がるほど高くなる傾向がみられる。また、家族の世話をする頻度は、「ほぼ毎日」が3割強、「週に3~5日」が3割弱となっている。「週に1~2日」が2割強、「1か月に数日」が1割で続いている。家族の世話に費やす時間は、「30分未満」が6割弱で最も多い。学年が上がるほど高くなる傾向がみられる。『1時間未満』で約8割を占めている。家族の世話について、きついとは感じていない子どもが過半数を占めている。

7. 悩みや困りごとの相談相手

P118 困っていることや悩みごとがあるとき相談できると思う人については、「親」、「学校の先生」、「学校の友達」が多い。「相談できない・したくない」はいずれの学年も1割に満たない。国の調査結果と比較しても「相談できない・したくない」の割合は低い傾向にある。

8. 全体としての生活満足度

P119 最近の生活の満足度については、小学5年生の8割弱、中学2年生と高校2年生の6割強は、「7~10（計）」と回答している。学年が上がるほどの割合が低下する傾向がみられる。無回答を除く全体の平均点は7.5点（小学5年生8.1点、中学2年生7.2点、高校2年生7.1点）となっており、総じて生活満足度は高い。

9. その他

P125 新型コロナウイルス感染症の拡大により変化があった内容について、「地域のクラブ活動や学校の部活動」が減少している。「親以外の大人や友達と話をすること」は増加しているが、反面「イライラや不安、気分が沈むこと」が増加している。

P128~132 （家以外で）放課後や休日を過ごすには、「あれば利用したいと思う」の割合をみると、いずれの学年も「ともだちと気軽におしゃべりできる場所」、「体育館運動場、スポーツ施設等の体を動かすことができる場所」、「ともだちと音楽等の趣味を楽しめる場所」、「ひとりでゆっくりと過ごせる場所」が高い。



令和5(2023)年3月
柏崎市子ども未来部 子育て支援課
電話 0257-47-7075 (直通)